

「算数のよさ」の実感

子供たちの6年間の集大成として、「フィボナッチ数列」を材としたご授業を展開された山内教諭。7段の上り方が何通りかという「できそう、でもなかなかできない」という目の前の子供たちの実態に合わせて設定された問題により、子供たちが探究に没頭していく姿が生み出されていました。「何か規則性があるはずだ」と直感的に感じながら、懸命に考えていく子供たち。規則性が学級全体で共有された後でも、「自分でやり切りたい」「本当にそうなるのか、樹形図でもやってみたい」と探究を連鎖させていく子供たちの姿が見られました。「答えが分かったから終わり」ではなく、自力で到達しようとする姿は、これまでに算数の見方・考え方を十分に洗練させ「算数のよさ」を実感してきたからこそ生まれたのではないのでしょうか。フィボナッチ数列を取り上げる意図やタイミングについても議論がありましたが、それがあったことで、最後まで粘り強く取り組む姿が生まれたのではないかという意見が出されました。粘り強さと探究の連鎖との関わりについても見いだされた実践となりました。生活や自然の中にある数学を身近に感じたことで、子供たちがこの先、どう数学に興味関心を抱いていくのかが楽しみです。

成功体験＝「分かる」と「できる」を結び付ける

体育科 岸本教諭「すきまをねらって ボールをとおそう！」のご授業では、子供達自身が「力具合」「位置」「空間」の概念を働かせることで、学習課題の解決に主体的に取り組む姿を目指された。子供達は探究の過程において、「力具合」「位置」「空間」の概念だけではなく、シュートタイミングをずらす「時間」の概念を働かせていた。また、「一緒に〇〇する」という「関わり」の概念を働かせていたのではないかという意見も挙げられた。研究協議では、ボードやシート活用について様々な意見が交わされた。低学年にとっては難しい材であるが、それが学びに適している子供もいる。あくまでもこだわりたい所は、「空いている所をねらうこと」である。作戦を考えることがねらいではなく、遊びの拡張の中で自然に見えてきた子供たちの考えの表出が作戦となる。改めて、子供たちが材やルールをつくる（選択する）ことができる場の設定が大切であることが見えてきた。また一年生の発達段階では、「やってみる」ことの重要性が顕在化された。今日の授業においても、「クロスしてシュートすると得点がとれたよ！」「シュートする所を変えると得点がとれたよ！」と、やってみたことでの気づきが共有された。その気づきを再度、やってみることで「できた！」と学びの自覚につながった。そうした成功体験が、「分かる」と「できる」を結び付け、子供達の探究を加速的に連鎖させる。体育部の大切にされている遊びの拡張について、新たな可能性が見出された実践となった。

